
だんだん自分が消えていく

yuririna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だんだん自分が消えていく

【Nコード】

N9521M

【作者名】

yuririna

【あらすじ】

兄貴のように作家になりたかった。夢をあきらめ、不器用に家族のために生きた。家族に愛され、嫌われ孤立し、懸命に生きた。60過ぎた頃、やつが忍びよってきた。それに怯えながら家族を守り、生きた。

〈写真をもって〉

ある男がホームに入る日に

克哉は三枚の写真を鞆に入れた。

一昨年の春、義理の弟リュウと小樽を散策した時の写真だ。

いま、記憶にある一番楽しい思い出は、リュウとの小樽の散策だけだった。

だんだんと薄れていく、自分の記憶に、これだけは留めて起きたかった。

母の一周忌に故郷の琴似を訪れ、その帰りに寄った小樽のリュウ夫妻の家に二泊。

リュウが撮った三枚の写真。

良い写真ですね

誰もがそう言った。

最近克哉は、日記がわりにしている黒い皮表紙のノートに、毎日書き記していることがある。まだ生きている兄弟たちの名前を書き、そして…死んでしまった兄弟たちの名前に一本線を引いて消すこと。

手の届かない所へ逝ってしまった兄弟たちなのに、日々こうしてノートに書かないと自分は忘れてしまうのだ。

明日は自分は『ホーム』へ行く。

家族と離ればなれになるというのに、妻の淑子も長女の真希も、最近は何も語りかけてくれなくなった。

解らないことがあって、彼女らに聞いても、「何度も聞かないで！」

こう言われてしまう。

今では、自分から質問することは諦めてしまった。

オレ、かなりキテるな…

トイレの場所も、この部屋にずっといいのかも、わからない…。小樽に行ったとき、オレはリュウたちにこう約束したんだっけ。

「養老保険が満期になったら、心の病気で四十年間一度も里帰りが出来ない淑子を連れて小樽に来るんだ」

帰郷

父克哉五十四才、ホーム入所二十二年前、長女真希、夜学の三年生

そろそろ行かなきゃ…。

真希はジャージに着替え自転車で店に向かった。

東京は平和島での新聞奨学生としての生活にも大分慣れた。

欲を言えば他の女子学生のように、もう少し華やかにお洒落もしたいものだが。

昼間の高校を卒業してれば、新聞配達までして意地になって大学進学などしなかっただろう。

それに留花のように早く家を出るにはこの方法しかなかった。

学費などあの親たちが出せるわけがない。

大手新聞社の奨学金制度を真希は使うことにした。

新聞社が学費と住まいを保証する代わりに、専売所に所属し新聞を配達すること。

食事は朝夕はお店が用意してくれる。

勧誘をちよつとがんばれば小遣いもできる。朝の3時起きにも慣れた、3年目の冬の出来事だった。

夕刊を配ってから大学にいくのであるが、店で配達準備をしていると、店内設置してある公衆電話が鳴り、専業さんが受話器をとり真希が呼び出された。

母の淑子からだった。

「真希、お母ちゃん病気で眠れないし、お父ちゃんが死ね死ねっていうから、お母ちゃん死ぬから。あんたも幸せになりなさい」

こう言つて電話は切れた。

所長！家に帰つてもいいですか？おかあさんが、今死ぬつて…言い終わらないうちに涙が溢れてきた。

母からの自殺予告の電話を受けたあと、

急遽配達を代わってもらい平和島から実家の千葉へ向かった。
帰りの電車の中では涙が止まらなかった。
そして集まった妹たちと母の置き手紙を読んだ。

留花、依子へ

眠れないから、やりくりが出来ないから、お父ちゃんが死ね死ねっ
ていうから、死を選びます。
いい子になるんだよ。

そして真希には直接別れの電話をかけてきたのだ。

二人の妹たちは手紙を読んで泣きだしていた。

真希はなぜかこの時

今の新聞奨学生になるため、旅立ちの時、母と妹たち、定時制高校
担任のヨシオ先生、受験指導をしてくれたチンタラ先生が駅のホー
ムに見送りに来てくれたこと

母の淑子が、新聞配達は大変だからといって、真希の布団を打ち
直ししてくれたこと

「ヨシオ先生ね、

真希を見送りながら、目が真っ赤だったよ…俺の大学の同級生も新
聞配達やってんのいたけど、みんなキツくて続かなくて学校やめて
ったんだ、真希はつづくかなあって言ってたよ…」
こんな母の声を思い出していた。

母の手紙

どこからあんな声を出していたのか。

頭の先から？

魂の奥から？

真希は目覚めず酈をかきつづける母を抱き起こし父の克哉が車を取りに言っている間、半狂乱になって母を呼び続けた。

「お母ちゃん死なないで…」

そう一言つぶやいてしまうと

もうあとは声が迸りでてとまらなくなっていた。「お母ちゃん！

お母ちゃん！

「お母ちゃん死なないでー！」

「お母ちゃん！」

母淑子を捜しに鶴山に父の克哉と車で登り、

花見の宴席になっていた今は冬の、葉の落ちた桜の木々の根元や銅像の陰や、

広場の簡易休憩所の中を、真希と克哉は淑子を呼びながら歩き続けた。

「おい！」

「お母ちゃん！」

もうすでに死んでいる母を見つけるのが怖かった。

その恐怖に追い討ちをかけるような父の言葉が胸に突き刺さったまま、真希は母を捜した。

「…お父ちゃん、お母ちゃんの手紙に、お父ちゃんが死ね死ねっていうからって書いてあったけど、
本当にそんなこと言ったの？」

留花の言葉により向かった鶴山への車中で、

真希は既にわかってはいたが父に聞いた。

「…そんなことより、捜さないとしようがないだろう…」

克哉ははつきり返事をしない。

「お父ちゃん！言っただの！？お母ちゃんに死ねって！

お父ちゃんのせいだよ！」

「仕方ねえべや！淑子はある病気で、俺本当は死んだ方がいいと思ってるよ！

こんな捜しても見つからないんだから、もうどつかで死んだんだべや！」

まさかこの状況で実の父親にこんなことを言われるとは

自分に与えられた現在というものが、あまりにも耐え難く、真希はそれ以上克哉には何も言えなくなった。

育まれてきたはずの家族の絆が、ズタズタに真希の心とともに引き裂かれていくのを感じた。

長女の真希は幼少の頃、克哉にたいそう可愛がられた。

克哉のバイクの後ろに乗り、よく散歩にも出かけた。

次女の留花が

「お父ちゃん、お姉ちゃんばかり連れて行って」と拗ねるくらいに。

真希も父を慕っていた。

たまに真希を誘わずに出かけようとする父親に

「ついてくるな」と言われてベソをかいたことを覚えている。

―あの頃の父と、今自分の横で母の死を願っている父は別人なのだ―
真希はそのとき、そう思った。

発病、そしてーひとり通夜

克哉六十二才、ホーム入所十二年前

「オレ、金がないからタカシの通夜行けないからよう、今夜はタカシのためにここで一人通夜の酒酌んでんだよ」

真希は、父の克哉が留花に酔いながら電話で語りかけているのを聞いていた。

克哉が六十二歳の時だった。

克哉は六人兄弟の三番目。

久しぶりに兄弟姉妹全員、故郷の北海道は琴似に集まって飲もうとすることになった。

生活が苦しかった克哉は、千葉から琴似までの旅路を古ぼけた自分の小豆色の中古車で向かったのだ。

途中車中一泊のための毛布をたずさえて

琴似の実家で何十年ぶりに兄弟たちに会えることが決まった夜。

俺は、その日をどんなに楽しみにしたことだろう。

旅費がなく自分オンボロ車で行くしかなく、すでに家庭では孤立していたから、

誰も俺には旅費を援助してくれなかったけどよ。それでも、本当に

うれしかったんだ。

上司が会社の金を使い込みしていた。

俺は気が小さいからそれになんの手も打つことが出来なかった。

もともと現場から会社の経理に変わったときも俺の遣り繰りが下手で、会社の金を足りなくしてたし。

折り合いが悪かった上司はそこにめをつけたんだ。

北海道にいたときは良かったなあ。

部下に慕われてボスなんて呼ばれてさ。

30年勤めたニッケンをやめてからは、一生懸命働いたけど、家族はだんだん離れていったよ。

まずは次女の留花。あいつ俺にバイタ！なんて言われて泣いてたな。家を出て心配して真希と一緒にアパート見に行ったとき、男といったから俺も頭に血がのぼってよ。

真希は高校いる間は家にいたけど、東京で新聞配達しながら大学行くんだって、出てったよ。

真希が東京行って3年目に妻の淑子は自殺未遂しちゃうし。その医療費で困ってたら逸夫兄さんが黙って50万貸してくれたっけ。

逸兄さん、まだ返してなくてごめんな。

俺、完ぺきにウチで嫌われもんだよ。

だから、嬉しかった。

心置きなく、兄弟たちと酒を酌み交わせるのは。

しかしその場に一人加わらない人間がいた。

四男のタカシだった。

皆で「こないなあいつ、どうしたんだ」って心配してた。会社やめて離婚して独りだし、連絡もないし。

あとでどうしてだかわかんだけどな…悲しいよ。

俺、

兄弟たちに会えたあまりの嬉しさに酒を飲み過ぎ、倒れた。

倒れたとき皆心配して介抱してくれて、俺完ぺきにうれしくなって「ああ…みんなすまないなあ、世話になって…」って心から言ったよ。

すぐに小樽の大学病院に運び込まれ、

意識が戻ったとき、

病院の公衆電話から、千葉の自宅への電話のかけ方を

俺は忘れてしまっていた。

「真希ちゃん、あんた一体…」

ケイ叔母さんから電話が来た。

「世話になってますって葉書一枚くらい送れよ…」

雅彦おじさんからも。

克哉が実家の小樽で兄弟たちとの酒宴の最中でたおれた。

そして小樽の大学病院に運び込まれてから一ヶ月。

克哉の三人の娘たちのうち、次女の留花と末っ子の依子は嫁いでいた。

克哉は長女の実希と妻淑子の三人で暮らしていたのであるが、淑子は病弱で到底夫の看病のために小樽まで行けるはずもなく、かといって嫁いでいる娘たちはそれぞれの家庭で手一杯ということになる。

そうすると当然、長女の実希が克哉の看病に小樽に来るべきなのであるが…、

真希にはまったく考えられないことだった。

八年前の、

母の淑子が自殺予告の置き手紙を残し行方不明になった夜、

最初に母の搜索に出掛けていた留花とその恋人が、発見をあきらめ帰宅した。

つぎに東京から慌てて駆けつけた真希と克哉が

克哉の車で母の搜索に出かけることになった。

「…鶴山に行ったんじゃない？」

春に家族皆で花見に出かけた山の名を留花は言った。

その山へ向かう車中で、

克哉が真希に言った言葉を、真希は忘れてはいなかった。

克哉の弟妹たちに散々ボロカスに言われながらも、ついに真希は一度も小樽へ父の看病にいくことなく、

意識が戻った当初電話のかけ方を忘れていた克哉も、医師の適切な処置のお陰で、脳の機能は正常に戻ったように思えた。

しかし数年おきに発作を繰り返し、容態が悪化してゆくこととなる。

〈佐伯家の兄弟〉

克哉、ホーム入所後6ヶ月

「なんで電話に出ないのよ」

克哉の姉、志麻子の最初の言葉。

「なんでって…」

「何回かけても出ないから、なんかあるんだろうなっておもってさ」
別に借金取りから逃げているわけではなく、就活やバイトで忙しか
っただけなのであるが、

志麻子は切羽詰まった理由をかんがえていたらしい。

「お父さんは？」

志麻子は弟のことを尋ねた。

「老人ホームだよ」

こう答えることにいい加減慣れてしまった真希はそっけなく言った。

「えっ老人ホームってどうしたの!？」

「父は認知症が進んで徘徊が始まってたから…、私も早く仕事さが
さなきゃなんないし…」

それで留花が施設に頼み込んで、順番を早めてもらった」

「克哉はそんなだったの？」

「はい…」

33年前、

克哉たち一家が北海道から内地に転勤になって以来、嫁いで立川市にいる姉志麻子と、川越市に嫁いだ妹のケイが克哉になにかれと面倒をみていて身近にいる支えだったのだ。

「真希ちゃん…」

志麻子は、この姪に何をいつてあげれば良いか考えているようだった。

志麻子叔母は、母の淑子が唯一慕っている義理の姉だった。

真希と留花が幼少の頃、函館勤務の克哉たち一家を訪れた際、志麻子は初冬に入り、寒そうな服装の真希たちを見て

「あんた、子供たちこんな格好じゃ風邪ひいちゃうよ」

その場でミシンを借りて真希たち姉妹に服を縫ってくれたのだ。

母淑子はこのときの様子を真希たち姉妹に何度もしたものだ。

「真希ちゃん…あんたのお父さんもこうなっちゃったし、叔母さんたちもう定年退職したから

年金で食べていくのに精一杯。

とてもあんたたちを助けてあげる力ない。

だから、これからは少しずつでも、お金をためるのよ」

聞けば当たり前のこんな言葉が、ひどく温かく胸にこたえる。妹たちとの確執…急いで今の住居に越してきた理由…。

「あんたのお父さんはね、ズボンを脱いだ形のまま放っておくような、ちよつとだらしない人だけど、頭は決して悪くない人だったの…」真希は黙って志麻子叔母の言葉を聞いていた。

この数ヶ月間に起こったあまりにも劇的な生活の変化に心が対応しきれずにいた。

母が慕っているこの叔母の声が、なぜか親しくからだに、心に響いてくるのだった。

「佐伯家の兄弟はね、陰性と陽性がいて、わたしと、あんたのお父さんと、亡くなった逸夫叔父さんとタカシが陰性。あとは雅彦とケイ叔母さんと和郎が陽性なの。何となくわかるでしょうっ?」

真希が高校二年生の春に、長く勤めた会社を辞めた父克哉は、それから仕事を転々とした。

ミシン屋の集金から新聞配達、警備員
設立間もない成田空港の三交替勤務では体調を崩し、不眠にもなった。

妻と三人の娘を抱えて生活は逼迫していった。

娘たちは皆夜学の高校に進学した。

そして娘たちが昼間は働き始めると、すでに職を転々としていた克哉は次第に無気力になり、会社を休むようになった。

娘たちの稼ぎをあてにしボーナスが出る時期には必ず長期に仕事を休む。

そんな父親に最初に愛想をつかしたのが、次女の留花だった。

長女の真希もとうに父親を嫌いになってはいたが、家を出て自活することは考えてはいなかった。

三女の依子はまだ九才で、彼女だけは克哉になついていた。

母親の淑子は相変わらず心の病が良くならず入退院を繰り返し、克哉の兄弟たちから借金をしていても三人が働いていても生活は苦しかった。

それなのに娘の収入をあてにして、時に働かなくなる父親。

そんな父親に最初に愛想をつかしたのが、次女の留花だった。長女の真希もとうに父親を嫌いになってはいたが、家をでることは考えてはいなかった。

三女の依子はまだ九才で、彼女だけは克哉になついていた。

克哉の不甲斐なさに上二人の娘は腹を立てていたが

留花だけが真つ正面から父にぶつかっていった。

「なによ！お父ちゃんが会社やめるから、家がこうなるんでしょう！」

その留花の言葉に

克哉はただ娘を殴りつけただけだった。

「あたし、出ていく！こんな家、でていく」

留花は殴られた頬、頭を押さえながら叫び、荷造りをはじめた。

「おう、出ていけ」

「あたしも出ていきたいな」

真希も留花に言つと「出ていきなよっこんな家、いる意味ないよ！」

「何処にいけないの？」

「わかんない、あたしは友達んち行く。お姉ちゃんもどっかさがないよ」

「陰性が、叔母さんと逸夫叔父さんとタカシ叔父さんと父ですか……」

叔母の志麻子と、電話でこんなに話し込むのは初めてのことだった。

克哉が元気なままであれば、こんな機会はなかっただろう。

「みんな、どつちかというと芸術家肌というか、そんな感じですよね。逸夫叔父さんは放送作家だったし」

真希は、皮肉にも逸夫が亡くなってから詩の才能を見いだされ創作するようになっていた。

そしてこの芸術家の叔父の残した詩をじっくり読みたいと思っていた。

叔父は詩人としても才能があり、ある文学賞を受賞していたが、ついに詩集は出すことはなかった。金がなかったのだ。

それなのに克哉の困窮には黙って50万貸してくれた。

そして

父の克哉も物書きになりたかった。

人より文章が書けたので会社でもその手の仕事は引き受けていた。

「兄貴よりオレの方が上手いってお父ちゃん言ってたよ」

「お父ちゃんもそういう道に進めば良かったの。勤め人なんて合わなかったの。世渡り下手だったじゃない」

母の淑子はよくそう語っていて夫の才能を信じていた。

たまに兄の逸夫がテレビに出演し評論などをしてしていると

「…ああ、オレも兄貴と同じように思ってたよ。オレもこういう批評力というか、審美眼あると思うんだよなあ…」

晩酌をしながら自分の今の職を転々としている現状に、同じ兄弟で似通った才能を持ちながらの兄との格差が、堪えているようだった。

真希が詩が、新聞の評論に載ったときは、

克哉は父として自分の血を引いていると思っただろう。

本当に嬉しそうだった。

「真希、詩が新聞に載ったのか」

日頃仲の悪い娘との会話のきっかけをつかめたこともあり、
克哉は真希に照れ臭さと、

自分の血を明らかに引いている誇らしさに嬉しさを隠しきれずに声をかけたのだが…。

「うるさい！話しかけないで」

「…」

克哉は黙って自室に戻った。

どうしても父と語り合わなかったのだらうと真希は思う。

今はホームに見舞いに行き、

克哉に文学の話などをして何もわからない。

あるとき、克哉とうたの話をするだけで孤独であった克哉を少しでも幸せにすることが出来たのに。

「そうね、兄弟の中じゃ一番の出世頭だったよ、逸夫叔父さんは。葬儀のときは、参列者がすぐくて芸能人の葬式かと思った」

志麻子は懐かしそうに亡くなった兄を語った。

「翔ちゃん、死んじやったね」

翔は、逸夫叔父さんの一人っ子だった。

「逸夫叔父さんも真梨子叔母さんも亡くなったし、あそこの家、死に絶えちゃったね」

真希は志麻子にそう言った。

克哉がホームに入った年の秋だった。

その前年には、‘陽性’のはずの雅彦叔父が脳腫瘍で亡くなっている。

タカシ叔父から始まった‘陰性’の兄弟ばかりを狙った不幸が

父の克哉は死なないながらも精神の死を意味する認知症に侵され
それでも足りなくて雅彦叔父と
まるでとどめを刺すように

長男逸夫の息子を狙い鬼籍へと連れ去った。

この数年、佐伯家には不運が続いていた。

「翔ちゃんね、健康診断で何度もひっかかったの。なのに病院い
かないで、ある日突然頭がイタイって救急車で運ばれて直ぐに入院
…意識不明になって二日後に亡くなったんだよ。奥さん、子供にな
あんにも言葉を残せないで」

人の亡くなり方はそれぞれだが、家族に何も伝えられないままとい
うのは辛い。

しかも病の原因は脳、精神といったところに集中しているような気が
した。

長男逸夫の妻真梨子は若年性アルツハイマーだった。

そして…逸夫の孫である翔の息子と、佐伯の兄弟で一番先に逝った
タカシの娘はある共通点があった。

知的障害者なのだ。

「あんたのお父さんはね、この前母の、あんたのお婆ちゃんにあたる人の葬式でね。緊張したのかまた卒倒してねえ…だから翔ちゃん亡くなった時にはすぐに知らせなかったの。また倒れると行けないから」

従姉の翔の死を知ったのは、年が明けてからだった。
志麻子とケイ叔母からの年賀状に記してあったのだ。

「タカシ叔父さんの奥さんと子供は今どうしてるの？」
真希は気になっていた。

タカシ叔父の生きざまは
父の克哉に似ている。

真希は小学生の頃

克哉に連れられてタカシの結婚式披露宴に出席していた。

「可愛い律子は誰のもの…」
宴では、当時流行っていた流行歌を新妻の名前にかえて式の参列者全員が合唱していた。

うたの最後に
「オレのもんだ」タカシが司会者のマイクを取り上げそう言って唄を締めくくった。

幸せな時は長くは続かなかった。

結婚して15年を過ぎた頃

タカシ叔父は、上司と仕事上の意見が合わず、退職に追い込まれた。妻は、生まれながらに知的障害がある娘を抱えて、将来の不安もあったのだろう。

次第に夫婦仲は冷えてゆき、そして離婚。妻は娘を連れてタカシのもとを去っていった。

孤独に苛まれ、タカシは酒浸りの失意の日々をおくっていたらしい。

琴似の、兄弟たちの宴に來なかつた夜にはすでに蒲団の中で事切れていたのだ。

父も、母に離婚されていたら、あるいはタカシ叔父のようになっていたのではないか

皮肉にも母淑子は病弱で離婚したくてもできない、自立できる生活力がないと娘たちには言っていたが。

克哉が小樽の大学病院を退院し、千葉に戻ってきてからタカシは発見された。

食わずに飲んでばかりの生活での衰弱死のことだった。

父の克哉は、泣きながら留花に電話をかけていた。

「タカシが可哀想だ……」

一番に家を出ていった娘なのに、

真希と淑子では

こんな取り乱した自分を受け止めてくれないと思っていたのか。留花も受話器をもって父の悲しみをじつと受け止めていた。

後に留花は真希に

「お父ちゃんに、タカシ叔父さんの葬儀に行く飛行機代だしてあげようかって、うちのと話してたんだ」

留花は本当に優しい、姉妹の中でも一番美しい娘だ。自分にはこんな優しさと、強さはないな。

留花のことを思うたび

いつも真希は有り難さと申し訳なさにかられる。

自分も克哉に違わず不甲斐ない姉だから。

知らない、律子さんたち離婚して何処に行ったか…もう縁は切れてるし

志麻子叔母はそう続ける。

「タカシ叔父さんって孤独死なんですよ？」

「そうだね…真希ちゃん、

叔母さんね、お父さんとは仲良くてね、アレは昔から大人しくて、和郎や雅彦なんかとちがって内弁慶なところもあったけど、頭はよかったの。優しいところもあったの。だから、弟のことをずっと気にしてるの。

淑子さんが心の病気になってからは弟も苦労してるし

お父さんの見舞い、一週間に一度は行つてあげて。

あんたがこうやって家賃払えるのも、お父さんのお陰でしょう？

育ててもらった恩もあるでしょ？」

「母が病気になったのは、父のせいなんです！

お酒のんで家族に当たり散らして…」

真希が気色ばんでくると

「飲まずにいられない時だってあるでしょうっ」

志麻子叔母も、弟を庇って弁護してくる。

「叔母さんは、その場にいないから、わからないんですよ、父のおかげで母がどんなに…わたしや留花、依子だって」

「そうは言っても、お父さんでしょうよ」

志麻子との言い合いの中で

真希の中の何かがザワザワと羽音をたてていた。

自分たちは、父が、克哉が、キライだ。キライなんだけれど…。

同級生の手紙から

真希が父克哉の見舞いから帰ると、克哉の高校時代の同級生から、同窓会の案内が来ていた。

差出人は、和泉という男性。

父と仲が良かったらしいこの人からはたびたび葉書が届く。

しばらく沙汰がないことを心配している内容が葉書の文面に綴られていた。

まだ克哉が認知症になってホーム入所したことに順応しきれない気持ちを引きずっていた頃は

この葉書はあえて目に触れないところにしまい込んでいた。

志摩子、ケイ叔母たちからは毎年賀状がくるが、克哉の末の弟和郎などは

ホームに入所したことを知って以来

克哉が結婚式に出席した和郎の娘夫婦とともに、沙汰がなくなっていた。

真希は克哉の小樽大学病院入院の件 看病放棄の件以来、克哉の兄弟たちの嫌われ者になっていた。

そして

父が家の中からいなくなってしまったことに慣れなくて

母淑子との二人の生活に、シマリスのモモを加えた。

当時真希と妹たちとの関係はあることをきっかけに壊れかけていたのだが、

それをモモが取り戻してくれた。

孤独感からふらりと入ったペットショップで目に飛び込んできた愛らしいシマリス。

真希は迷わずモモを買い求めた。

母と自分の様子を時々見にくる妹たちも、最初はギクシャクとした会話をかわすだけだったのが、新しい家族となったモモのあまりの愛らしさが一気にその場を和ませた。

モモを見ているだけで、ささくれだった心も温まってくる。

真希はこの、和泉という父の旧友に葉書を書くことにした。

和泉玲からの返信

真希さま

お父様の近況をお知らせ頂き有難うございます。

唯々驚いております。

毎年賀状を頂いておりましたのに、と心に引っ掛かっておりましたが…。

お父様はもともと大人しく、どちらかと言いますと、気の弱い方でしたので、加齢と共に孤独になっていかれたのでしょうか。

東京同期会に毎年、お誘いしていたのですが、多くの人の集まりの中に出ることを嫌っておりました。

今思えば、無理にでも、お誘いすれば良かったと残念に思っております。

今となつては、あまり無理に記憶を呼び戻させる事をせず

施設の介護を信じ、心静かな余生を過ごさせてあげるのがベストだと思います。

私も、特養老人ホームに勤務し多くの利用者と又、その家族の方々と接して来ました。

認知症の方も多く見て来ました。

これらの方々は、すっかり子供のような純粋な心にかえって行くのですね。甘えたり、我儘を言ったり…。

優しい、温かい愛の言葉が、たとえ一瞬であっても、理解する事が

出来、何よりの救いと受けとめるのです。

真希さんも、大変と思いますが
お母様の精神的な面を支えて差し上げて下さい。

もう少し暖かくなりましたら、施設の方へ面会に行きたいと思っております。

どうぞ、焦らず、お体にお気をつけられ、頑張ってください。

二月三日

佐伯 真希様

和泉 玲

父は和泉さんには、家の事を話していたのだな…。

父と母が逝っても

わたしは自分の人生を生きてゆかねばならない。

父はもうじき精神の死を迎える

母はゆっくりとだが、認知症が進んでいつている。

家が良くなりかけたことがきっかけでのめり込んだ信仰も、もうつかみきれなくなってしまうている。

妹たちは家族がいる。

わたしは誰のために生きる…？。

あの教団にいれば自分や家族や、世界までも救済できると思った。
しかし

身近な家族でさえ救えていないではないか。

地元で教団の支部が出来たときは、迷わず世話人になった。

が、資金が続かず人間関係にも疲れて、退任した。

皮肉にもその翌年、父克哉の長兄の逸夫叔父が亡くなった。

自分が懸命に世話をした信者が、隣接する支部の支部長に会社の共同設立を持ちかけられ、一千万円を騙し取られた。

自分に近い信者も、家族親類縁者の誰も救えていないではないか。

世話役を続けていれば、幸せにすることができたのか？

とりあえずは今、父と母のために生きるしかない…？

そのあとは…？

「真希ちゃん、アンタたちのお父ちゃんはね…苦小牧にいるとき

は長靴大将なんて言われてね、部下にも人望あった。

現場の仕事が合ってたんだよ。でもね、栄転になったといっても内勤の経理部は合わなかったんだよねえ……」

克哉の妻の弟慎三は、克哉のことをそう語った。

高校卒業後は定職に就かずブラブラしていた慎三だったが、

姉の淑子が克哉に頼み込んで、ニッケン株式会社に職を得ることが出来たのだ。

勤務二年目に会社の金の使い込みをして克哉の顔を泥を塗ったが、どうしたことが世渡りの上手い慎三はこの窮状を切り抜け、定年までこの会社を勤めあげている。

克哉にとってはお調子者のホントに困った義理の弟であるが

慎三は克哉を慕っていて、人嫌いであるはずの克哉も慎三宅にはよく通っていた。

淑子は実の弟であるはずの慎三を嫌っていたが……

克哉にしてみれば、心を病んだ妻淑子の事を含めて家の事情も知り尽くしてる義理の弟は

唯一の気を許せる話し相手だったのかもしれない。

「佐伯さんもなあ……ニッケン辞めてから色んな仕事して苦労した

よなあ…ようやく五香で安定したと思ったら、事故起こして…あれ、会社は引き留めたけど佐伯さん、自分で辞めたんだよなあ…」

お父ちゃん、あたしたちのためにお昼は餡まんいつこで、ミシンの集金の仕事してたんだよね…。

(…末っ子の依子はそう言っていたな…)

昨夜は母は幻聴による騒音に悩まされ不眠を訴えていた。

淑子も徐々に認知症が進み、昼夜逆転が始まっている。

昼間、真希が非番のときに母の様子を見てみると、ちょっとしたスキに鼾をかいて寝ている。が、…声をかけるとすぐに起きる。眠りが浅いが、すぐに船をこぎ出す。

そして

甘い物への過度な執着。世代的なものもあるだろうが、あんパン、甘納豆、餡ころ餅等

足が弱くなつてあまり外出できなくなっているせいもあるのだろう。散歩に連れていくなどして真希にとっても母にとってもうまく発散させることが一番なのだが。

母は老齡だけに気をつけてあげないと糖尿病にでもなれば大変だ。

ホームに入る直前の克哉がそうだった。

砂糖壺から直接、砂糖を舐めていた。

認知症は味覚も鈍くさせる。

濃い味つけや甘い物を好むようになる。

克哉の、スーパーでの度重なるチョコレートの万引きも認知症によるもので、単にお金を払うのを忘れただけだったのだが…

「すっごい騒音：ガーって…あんた聴こえない？」

真希には、聴こえない。

母淑子が可哀想になってその夜は教団に教わった祈り方で母のために祈った。

自分の部屋には戻らず、母の寝室の隣のリビングで、明け方母の寝息が聞こえて来るまで炬燵で寝た。

おかげで体が少しだるい。

今日は会社が休みなのでまだましなのだが

真希は、教団に克哉と淑子の病氣平癒祈願の形代を出しに行く支度

を始めた。

やはり、やめられないのだ

青のセーター

真希は、嫁いだ妹留花にメールを送った。

一昨日から母親の介護のことでメールのやりとりでケンカしたままなのであるが、

留花しか話せる相手がいないのだ。

留花は、おかんと一緒に住んでないからわからないんだよ！
まともな話し相手になってくれる家族がいる人にはね！

チヨコレート盗み食いしたのを怒って叩いた私が悪くて最低だったの？

これが続いて糖尿病にでもなったらどうすんの？

見ているだけで綺麗事言っただけアマネに良い顔するのなら、誰にだって出来るんだよ！

留花からの返信メールがくる

あたしはいい顔なんてしてない。

23年間、家庭持つて、子供たち育て上げ、家の事仕事の事、やってきたよ。あんたには苦労話しようとは思わない。

みんな色々あるんだから、自分だけ大変だと思わないで。

大変なのはみんな同じだよ。いつも気にかけてる。

依子だって同じだよ。…忙しいからメールはすぐに送れないだけ。ちゃんと見てるよ。変に思わないでね。

…留花も仕事と主婦業やりながら、お父ちゃんの入院の世話で大変だったし、こっちは車がないせいで今回それをしないで済んだんだから

、自分だけ苦労してるって思っちゃダメよね…。

それに今甲斐性なしでオトンの入院費は妹二人に出させちゃったし…

携帯で留花へメールを打ち続けているとどんどん感情的になっていきそうで、

真希は携帯電話を一先ずおき編み物で気分転換することにした。

「こうしてお母ちゃんのセーター編んで、それでお母ちゃんを叩かなければ、しあわせな家庭なのにな」

「うん」

真希の問いかけに淑子は静かな目をもって応える。

編み物の得意な真希、母親に辛く当たると自己嫌悪にかられ、贖罪のように編み針を動かしている。

母の顔には治りかけた、真希のつけた引っ掻き傷がある。

なぜここまでひどく母に手をあげてしまったのか…時に歯止めがき

かなくなる自分を直さないと…

そう思いながら一心に編む。

この冬はこれで4枚目だ。

一枚目は父の克哉へと4年前に身頃だけ編み放置していたものを仕上げた白のアランセーターだった。

真希が編み物を本格的に始めた中学生の頃

よく父の克哉は

「真希、セーター編んでくれない」

そう照れくさそうにいったものだ。

（編んであげればよかったな…）

今さらそう思ってももう遅い。だから尚更母の淑子に何枚も編んでいる真希がいる。

今はブルーのケーブルセーターを編んでいる。

お金があればそう高価でない、ちょっとおしゃれな外出着など買って済ますのだが、今年は厳しくまた、今回は合格しなかったが一時は受験勉強から解放されたこともあり、母と自分の共用のセーターを続けざまに何枚も編み上げた。

「…ケイ叔母さんから葉書来てたよ。ケイ叔母さんの旦那さんが事務所を閉めると書いてあった。自分たちを当てにするなってことも」

「…うん」

母はわかっているのかいないのか曖昧な表情だ。

去年、正月に妹たちが真希と淑子が住むマンションに訪ねて来なかった。

それまでは毎年姪たちも連れて賑やかにすごしていたのに。

ケイ叔母夫婦には、何も期待はしていなかったが、

ただ、交流はほとんどないながらも父の妹という血のつながりを確かめたかった。

それだけのために、身内の声を聞きたいがために衝動的にケイ叔母の家へ、千葉から埼玉まで出かけたのだった。

家にもあげてもらえなかった。

その時に、何を思ってたか夫が近々事業をリタイアすることをケイ叔母さんは言っていた。

そして、真希に厄介者を見るような視線を送った。

それには気づかないふりで、ドア前から直ぐにケイ叔母の車に乗せられ、世間話をしながら駅まで送られるのはつらかった。

…ケイ叔母さんも私の就職活動には色々心配してくれたし…
真希はこの日の叔母の視線は、忘れることにした。

飲み屋で

「……しかし、お母ちゃんが入院したときはオレ、泣いたなあ……」

真希10歳、留花8歳 父克哉39歳の苦小牧での冬

幼い姉妹に気づかずバックし続ける白い乗用車、

逃げても迫り続ける車にふたり姉妹は気が動転して、動けなくなっていた。

それに気づいた克哉はとつさに満身の力を込めてバックしてくる車を押し返した。

父と娘が緑町の定食屋で夕食を取り終えた帰り道での出来事だった。

この年、母淑子は市内の精神病院に入院した。

ある冬の日、

母親が

傷のついたレコードが何度も同じ箇所を珍妙に奏でるようにブツブツと独り言を、時には妙に甲高い声を発しながら朝食の支度をして

いるのを、姉妹三人は怯えながら見ていた。

近所の主婦仲間との人間関係が原因の発病だった。

末っ子の依子はまだ二歳と幼いことから、小樽の淑子の実家に預けられた。

母は入院の前に娘たちがさびしくないようにと、

家計をやりくりしてオルガンを買い自分のかわりに家においた。

上二人の娘たちは初めて母のいない冬を父と過ごした。

昼食は学校の給食。

夕食は父が帰宅してから

親子三人で線路向こうの緑町の定食屋によく行った。

朝食はどうしていたのか、覚えていない。

食べない朝もあったと思う。

留花が後に

‘お腹が空いて給食の時間まで水ばかり飲んでいた’と言っていたから。

母親のいないあまりに散らかり放題になった部屋をみた父克哉が

涙をポロポロこぼしながら

真希と留花に「お母ちゃんがないぶん、しっかりやらなきゃダメだろう？ なっ？」

幼い姉妹は、部屋を散らかして叱られたということよりも、初めてみる父親の涙にただただ驚いていた。

この冬、克哉は深酒をして部屋のストーブの前で寝入ってしまい、膝がストーブに当たり火傷しているのにも気づかぬくらいに泥酔していた。

骨が見えるくらいに肉が焼けていたが、病院には治療に行かなかった。

妻の入院費用で余裕がなかったのだ。

緑町での真希と留花が、夕食の帰り道で白い乗用車に引かれかけたのは、この時期だ。

妻の入院と幼い娘たちの世話に父克哉は疲れ果てていたのだろう。

真希、これ食べ、

克哉は自分でオーダーしたホッケを真希にすすめた。

「…男が一度長く勤めた会社を辞めれば、だめよ…」

酔いのまわりはじめた克哉は自嘲気味にそう言った。

真希があまりに父親に愛想がないだけに、克哉は間がもたず杯ばかりすすんでしまっている。

他の客と談笑していた女将が、それとなく親子の空気を感じ取ってさりげなく声をかけてくる。

「そういえば佐伯さん大変なんだわよね。元氣出してよ、お嬢さん一緒なんだから、ネッ真希さん」

タコちゃんの声かけにようやく真希は顔に笑みを浮かべた。

「タコちゃん、オレの最大の不幸はなあ、あの女房と一緒にになったことなんだよ」

真希 27才 克哉 56才 ホーム入所18年前

真希は大学を卒業し社会人になっていた。

仕事を終え、駅からバスに乗ると、克哉も偶然このバスに乗っていた。

父は車があるはずだがどうしたのか

そう思っていると、二人が降りるはずのバス停の二つ手前で克哉が

「おい、降りよう。ちょっと飲んでいかないか？」

いつもなら断ってしまうのだが、

今夜の克哉は、それをするのがなぜか憚られた。すがるような目…

いまは一人でいることに耐えられないような。

相手をしてやらなければ…お父ちゃんに…。

真希は黙って克哉とバスを降りた。

‘しもきた’という白地に黒い字で書かれた店の名。

女将は青森の下北半島から出てきたのでこの名前になった。

女将の愛称は‘タコちゃん’と呼ばれていた。

飲み屋で2

「タコちゃん、オレの最大の不幸はなあ、あの女房と一緒にになったことなんだよ」

ビールの杯を片手におどけた調子で語る克也。

「冗談めかしてはいるが、あれが父の本音なのだろう…」。

普通の家庭で育てられた娘であればジョークとして笑い飛ばすか、大げさに怒るふりをするところであるが、こんな冷ややかな視線で父親を見る娘がいた。

「お母ちゃんには困ったな…」

むっつりと押し黙ってビールとお通しを交互に口に運んでいる真希。

克也は構わずに独り言のように語り始めている。しゃべらずにはいられないように。

「佐伯さんこの前ねえ、あの人来たのよ。証券会社の伊東さん。会社の人たちと送別会だった」

「誰の?」「伊東さんのよ」

「彼辞めるのか…」

タコちゃんが二人に気を遣っているのがわかる。

真希と克也に交互にビールを注ぎ、娘の機嫌を損ねないよう父親に

語りかけてくれている。

彼女がが間に入ってくれたお陰で

真希はなんだかホットした気分だった。

普段家でもロクに会話のない親子なのに、いきなり飲み屋に連れてこられてもどうしていいか分からないのだ。

父克也にビールを注ぎ、

「佐伯さん今日は良いじゃない。娘さんとデートで」。

「いやあ愛想のない奴で困っちゃったよ、タコちゃん」

「可愛いお嬢さんじゃないの、お父さんにやっぱり似てるわね」

（なに言ってるんだか…どうぞこの父の相手してやってください、タコちゃん…）

真希の白けた飲みっぷりに少しく困りながらも女将は克也の相手をしてくれていた。

「それでね、わたし一度彼のワイシャツをクリーニング屋まで取りに行つてあげて家まで届けに行つたことがあるの。

‘着るもんがない’って言うから。

彼女とかいないんでしょうね。スゴかったわよ。新聞とか本とか積み上げられてて」

「アイツも書くのすきだったからな…俺の兄貴のこと知ってたよ」

「そりゃあ札幌地元の人だもん、伊東さん。道新文学賞でしょう。新聞社勤めるような人が知らない訳ないわよ。佐伯さんもどう？一発なんか書きなさいよ」

「いやいや」「佐伯さんだつてまだまだイケるわよ。書けばいいじゃない。お兄さんに負けずに」

「何言つてんだよタコちゃん。俺なんか今更書ける訳ないじゃんか」

「わっかんないわよう。お兄さんより凄い賞取ったりして」
お世辞とわかっていても、父克也はまんざらでもなさそうである。

真希は父親が女将と上機嫌で話すのを目にし、この父にもこんな面があるのか…と不思議な感情で見つめていた。

後に真希が勤め先の進学塾の塾長に初めての父との呑みを、授業が始まる前の休憩時に語ると

「娘と外で飲むのは、どこかくすぐつたいような、嬉しいような感覚なんだよね。お父さんは楽しかったと思うよ」

そんな楽しい飲みではなかったが。

「…他の人たちとは外れていつもひとりで飲んでる人だったでしょあの人…一回スゴかったのよ…上司の言い方が…なんであんなにひどい口のきき方するのか…びっくりしちゃった」

「浮いてたんだろ、俺と同じでさ」

「北海道新聞に仕事決まったってから、そっちの方が良いんじゃない？彼には」

「彼はまだ若いからなあ…羨ましいよ」

「最後の日も一人でね…ちょっと信じらんなかったわよ、送別会だつてのに。泣いてたのよ、伊東さん。可哀想ね」

タコちゃんの店『しもきた』のあるこの辺りは新日鉄の社宅団地があるので、ちょっとしたお食事処やスナックなども多い。

この店はタコちゃんの人柄で流行ってるんだな…。

親子の感情を敏感に察してくれた女将のお陰で、ようやく父の克也とスムーズに飲むことが出来そうだった。

ニッケンを退職後は娘や妻たちからも見放され

職を転々としながらもようやく今の新日鉄構内の五香株式会社の仕事にありついた。軌道に乗りはじめていた克也だったのだが。

「お父ちゃん、このあたりで飲んでたんだ」

「うん…」

「新日鉄関係の人、多いもんね」

「ああ…」

真希がようやくポツリポツリと父親に語りかけ始めたのを見届けて

タコちゃんはカウンターの二人の前から他の客の所へと移っていった。

「お嬢さん、お父さんにやっぱり似てるわね、か…」

女将に言われた台詞をそのまま照れくさそうに呟く真希

「しかし今日で会社最後だから、なんかまた悪いことおこるんじゃないかと思ってたら、やっぱりなあ…」

克也はポツリと言った。

自分から辞表を出したのだ。

またも飲酒運転が原因の事故を起こした。

会社には留まるよう言われていたが、

会社の業務内容が新日鉄構内の安全面での仕事であったから。

今日が克也の最後の勤務だったのだ。

（会社辞めるとは聞いていたけれどお父ちゃん、今日が最後の日だったんだ…）

「どうしたの?…」

真希は父にこう聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9521m/>

だんだん自分が消えていく

2010年11月16日18時33分発行